

コロナ禍が長期化するもと、大学生の経済的な困難とともに、心のケアに関する相談が増加している実態が、京滋地区私立大学教職員組合連合（京滋私大教連）が行ったアンケートから明らかになりました。

アンケートは、コロナ禍での学生と大学の実情を把握することを目的に2020年から毎年行われ3回目。対象となる京都・滋賀32私立大学・短期大学のうち、9大学（学生総数約80730人）から回答がありました。

経済的な理由から休学した学生が21年度には9大学で632人、退学者も172人おり、「依然としてコロナの影響で困窮している学生がいる」など、経済的支援の必要性を

“心の相談”1.5倍

京滋私大教連 コロナ調査

訴える回答がありました。また、学生からの心のケアに関する相談件数が7大学（2大学は無回答）で8872件あり、前年度から1.5倍化。「人と交流する機会が少なくストレス」など孤立感を深めている問題とともに、「対面授業で人前に出たり発言する機会があると大学に行けない」などの相談も増加しているとの回答もありました。

村岡倫委員長・龍谷大学教授は、「学生の心のケアへの体制強化が必要。感染防止対策や学生支援が、大学経営を圧迫しているとの回答も多い。大学ごとの対応には限界があり、国、自治体にさらなる支援を求めている」と語りました。